

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可  
昭和六十一年三月十五日 発行（毎月一回・十五日発行）

（通第四四〇号）

# 慈

# 光

第三十八卷

第三号

## 目

煩惱・悪業と御方便	近角常観	...	...	...	...	...
こころ	福島政雄	...	...	...	...	...
還相廻向	井上善右工門	...	...	...	...	...
慈光日誌抄	西元宗助	...	...	...	...	...
芬陀利華	村上速水	...	...	...	...	...
無相法信集「私は無仏法者」	岩崎成章	...	...	...	...	...
如来は同心の最大良友なり	花田正夫	...	...	...	...	...

# 煩惱・惡業と御方便

(四) 不承不承

近角常觀

如來の御慈悲は惡しきものでも助けたまうのではない、  
悪しきものをこそ助けんとの御心であると氣付かせていた  
だいて、何んとなく初つ言の様に繰返し／＼喜ばしていた  
だいて。此度の、社説も、講話も夫ばかりで、定めて  
皆さんに、此位のことに初めて気がついたかと笑われるで  
ある。

いかにも今迄とても言わぬでもなかつたが、今更のように  
に嬉しい、歎異鈔を幾十回講じたか、幾百回繰返したか知  
らぬが、新らしい歎異鈔を読む気がする。

喜ぶべきことを喜ばぬにて往生はいよ／＼一定とおもい  
たもうべきことなりと明らかに示されてあるにも拘わらず、  
心中に、それでも喜べるに如くはない、いそぎ淨土にまい  
りたくあつたら夫程立派なことはない、煩惱が起つてもよ  
いが矢張起らぬほどのよいことはないと思うてゐる。  
じやから、喜べるものなら喜びたい／＼、何となくこれ  
でも足らぬ／＼と思うて満足するときがない。満足せぬか

ら感謝の念が起らぬ、それで喜べるならまだしものことでは  
あるが結局喜へぬ、そこでしてやりにして喜べずとも御助  
けに間違はないと不精無精におしつけるのであるから、や  
はり物足らぬ、物足らぬ位ならよいが結局喜べんでもよい  
のじやと邪見に陥るのである。

「喜ぶべきことを喜ばぬにて往生はいよ／＼一定とおもひ  
たまふべきなり、喜ぶべきこゝろをおさへて喜ばせざるは  
煩惱の所為なり、しかるに仏かねてしろしめして煩惱具足  
の凡夫とおぼせられたることなれば、他力の悲願は、かく  
のごときのわれらがためなりけりとしられて、いよ／＼た  
のもしくおぼゆるなり」

何気なく読むと煩惱の所為なりと言うを自己以外のもの  
の様に思うて、煩惱といふ奴の所為じやと言つて自分の責  
任を免れたように感ずる弊がある。

煩惱といえばとて他人のことではない、我等が煩惱懊惱  
のことではないか、これほど喜ぶべきことを喜ばぬとは、

いかにも煩惱の深いことじや、しかるに仏はかねて御存知  
あつて煩惱具足の凡夫と仰せ下さることなれば、かくの如  
きのわれらが為なりけり、この様な煩惱の深い私の為の御  
苦勞と頂くのである。下の文にまことによく／＼煩惱の強  
盛に候にこそあるも此我身の浅間敷きことが知られた言  
じや。

和讃に煩惱具足と信知して本願力に乗すればと仰せらる  
るのが此処じや、如來様が煩惱具足の凡夫と仰せらる  
御言が私の身に沁み渡りたとき、かゝる煩惱具足の私をと  
頂かれるのである。歎異鈔の前の文にも「煩惱具足のわれ  
らは、いづれの行にも生死をはなることあるべからざる  
ことをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意惡人成仏  
のためなれば」と仰せられてある、悪人とはこの煩惱成就  
の私のことであると知らして貰うのである。

全体煩惱といふ業といふいかにも我身のあさましき  
こと、気がつかねばならぬ「よきこゝろの起るも善業のも  
よほすゆへなり、惡事のおもはれせらるゝも惡業のはから  
ふゆえなり」と仰せらるゝと、業なればいたしかたなしと、  
自分の責任を免がれたか、寛容でもされたもの、ようと思  
うようになる。これがそもそも大なる誤である。業は我等の  
の罪である。弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案すればひと  
へに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもち

ける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願  
のかたじけなさよ」と仰せられてある。このそくばくの業  
をもちける身にてありけるをとは、いかにも我身の罪惡の業  
ふかきを自覺させた御言である。

「さればかたじけなくも我自身にひきかけて、我等が身  
の罪惡のふかきをもしらず、如來の御恩のたかきことをも  
しらずして、まよへるをおもひしらせんが為にて候ひけり」  
実に我等はよく／＼罪惡のふかきもの、業多きもの、煩  
惱深き身であることを、知らして貰うことの出来たは、こ  
の煩惱、惡業を憐みたまう大悲の御心によりて自覺せしめた  
まいたのである。

我等は業を如何ともすべからざることであるが、その業  
あるものを憐みたもう如來の御心はいかにも有難いことで  
ある、それにつけてもいかにも業報のふかきことを懺悔す  
る次等である。

夫につきて思い出したは、或人の尋に昔の信者は何事で  
も前世の業報じや／＼といふ、今の青年は何事も如來の御  
方便じや／＼という、どうしたものかと尋ねられたことが  
あつた。

業報、まかせなれば何も他力をたのむ甲斐もないことじや、  
その業報の深いものをたすけんと誓いたもう御本願が辱じ  
けないのである、また何事も御方便じや／＼と喜ぶばかり

が信仰ではない、御方便は、信心を起せしめたもつ御方便なれば、眠目たる信心を忘れてはならぬ、しかるに動もすれば自己の為したる罪惡まで御方便である。と、いう様にいって責任を免れたような横着な考を持つことになる。

罪惡は飽迄我身の罪である。業報は飽迄我前世の宿業の元あらわれである、その罪惡業報に纏わっている私を見すてたまわぬ大慈大悲の御心はその罪業の身につきまといて逆悪もらさぬ誓願に方便引入して下さるのである、この逆惡もらさぬ誓願が信ぜられたが信心である。この逆惡のもの

(80) 無垢巻

をもらしたまわぬ親心が頂けたが信心である。

いかばかり御手間かゝりし菊の花、この罪惡業報のものを見すてたまわぬ御方便の御手引によりて、終に此の如き罪業のものをたすけんとの親の御心なりと一念发起信心清淨の花が開いて下されたのじや。

三八  
39

三八  
26

略文類の終りに曰く、「今宗師の解を披きたるに云く、如意と言ふに二種あり、一には衆生の意の如し。彼の心念に随つて皆応に之を度すべし。二には弥陀の意の如し。五眼円かに照し、六道自在にして、機の度すべきものを観そなはして一念の中前なく後なく、身心等しき趣き三輪開悟して、各益したまふこと同じからざる也」と。

次に又言く、「敬て一切往生の知識等に白く、大に須らく、慚愧すべし、釈迦如来は實に是れ慈悲の父母なり、種々の

方便をもて我等が無上の信心を发起せしめたまへり」と。実に弥陀は我等の心念に隨い、大悲の思召により我等を益したものと不同なり、又釈尊は種々方便を以て、我等が信心を发起せしめたもう御慈悲を仰ぎて、大に我身を慚うて責任を免れたような横着な考を持つことになる。

愧せねばならぬ、そこで之を結びて曰く、「明らかに知りぬ。二尊の大悲に縁て一心の仏因を獲たり、當に知るべし、斯人は希有人なり最勝人なり」と、嗚呼煩惱泥中には蓮華を生ず、此は凡夫煩惱泥中には蓮華を生ずる人に喻ふる也」斯る如來の本弘誓不可思議かを示すとは、實に、この悪業煩惱の我等が胸の中に信心開発の花が咲いた有様じや、妄念の中より称え出す念佛は、濁りにそまぬ蓮のごとくにて決定往生疑いなし。南無阿彌陀仏。

### 知恩報徳

御恩を知らせていたゞくということは、容易のことではない、親鸞聖人の御出世せしませばこそ、我等が如來の御恩を知らせて頂くことが出来たのである。

「かたじけなくも我御身にひきかけて、我等が身の罪悪のふかきことをもしらず、如來の御恩のたかきことをもしらずして、まよへるをおもひしらせんがためにてさふらひ

けり」

御恩々々といえば何氣ないえど、一通りのことではない、当たりまえのものがたすかるのではない、とてもたすかるべからざる罪惡の深きものをたすけたもう御恩である。それゆえ「聖人常々の御述懐には弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と仰せられた。

このたすからぬものをたすけて下さる御恩を知らして下されたのが御一代の御教化である。廣文類の初めに「難思量の光明は無明の闇を破するの大船」と仰せられた、とても渡ることの出来ない海を度して下さる御恩である。同様に「無も明らかになると出来ぬ闇を破りて下さる御光である。

私の親が臨終に「仏が助けて下さるのが有難うござりますな」と親に申したるところ、親が「助からぬものを」と冠させて下されたのが今更つく／＼有難くなつてくる。

蓮如上人「御膳を御覽じても、人のくはぬ飯をくくべきもの衣食う様に思つていては實に御恩しらずである。ことよと思召候由仰られ候」衣食につきて、御恩じや／＼と口には言いつ、あたりまえの様に思い、衣食ふべきものを衣食う様に思つていては實に御恩しらずである。

聖人が「何れの行も及びがたき身なれば」の一言は實に

我等は衣食すべき果報のあるものではない、無事で日暮しの出来るべき価のあるものではない。人の尊敬を受くべき資格のあるものではない。それが安々と衣食を賜わり、日暮しをなし、過分なる果報をいたゞくといふことはよく／＼

衣食の恩、社会の恩、乃至父母の恩に至るまで、この価

なきものに与えらるゝ、ということが分らねば恩が分からぬ、この価なき、罪深きものを捨てたまわぬといふことは真に如來の御恩である。

親の恩が分らぬものがどうして仏の恩が分かるものかという世間の言である、されどそは逆である、仏の御恩が分らぬものがどうして親の恩が分るものか。

我身が悪い／＼と歎きつゝあるは我身の悪いが知れたのでもなく、御恩が有難い／＼と喜ぶばかりが御恩が知れたのでもない。

悪いからよくせねばならぬ／＼といふは修養上から言えば感心なる事なれど、信仰上から言えばまだよくなれる資格のあるもの、如く考えているのである。

悪くとも助けて下さるのが有難いというのは、真に我身の悪い事が知れたのじやない、動もすれば猶より已上に悪しきことがなし得るよう思う下心がある。眞に底下的凡愚であると分つておらぬのである。

聖人が「何れの行も及びがたき身なれば」の一言は實に

このよくなる資格なき我身にして、又この上悪くなり得ぬ  
我身たることを知らして下さる御教化である。

法然聖人が「貧窮困乏少聞少見、破戒無戒の者の選択本願なり」と示したましいことは三百八十余人皆同様なりしかど、出来得るかぎりは念佛の外に善きことをなさんとの心が残りておる、何れの行も及びがたき身なればとの自覚が起らなかつた。

それ故結局自分は貧窮困乏、少聞少見、無戒破戒でない、ということになる。故に我が為の本願なりとの心が起らぬ、しかるに聖人ばかりは無戒破戒愚痴無智というは他人ごとでない、自分の事である、「悲哉 愚禿鸞愛欲の廣海に沈没し、名刹の大山に迷惑す」と慚愧せられたのである。

その業を持てる親鸞を助けんとの本願なれば、「ひとへに親鸞一人がためなりけり」と仰せられたのである。これ実に我御身にひきかけて我等に知らして下された如來の御恩である。これは十方衆生何人も知らねばならぬ御恩である。實に私一人が罪業深重なるが為に長々の御苦勞を御掛け申しました。五劫思惟の御心配も私一人が悪かつたためであります。今まで軽々と御恩々々と言っていたが、かほどまでの御恩とは知らずにおりました。これが即ち如來大悲の恩徳である。

恩を知るということは實に容易なることではない、この

出援不明

「このよくなる資格なき我身にして、又この上悪くなり得ぬ我身にひきかけて、知らして下されたればこそである。

御恩を知らせて貰うたは實に御開山聖人御出世ましまして、我御身にひきかけて、知らして下されたればこそである。

その開山聖人の御信心を我身に知らして下された有縁の善知識の御恩である。これ實に師主知識の恩徳である。

聖人が法然上人の御恩を感謝して「曠劫多世のあひだに生も、出離の強縁しらざりき、本師源空いまさば、このたびむなしくすぎなまし」と仰せられ、聖覺法師が「倩々教授の恩を思うに、實に弥陀の悲願にひとしきもの歟」と仰せられたが此処である。

かく、たすかられぬ我身をたすけたもう御恩がしれた已上は、もはや人生の一大事は結了したのである。多生曠劫の宿題は解決し終りたのである。我身は務として為すべき仕事はない、残生の一舉一動皆感謝の生涯である。況んや此の如き高く、此の如く深き御恩に対しては、如何なる感謝も大海の一点、須弥の一塵に過ぎぬのである。

聖人が聖覺法印の源空上人讚の御言そのまゝを和讃に作りて曰く。

如來大悲の恩徳は、身を粉にしても報すべし  
師主知識の恩徳も、ほねをくだきても謝すべし  
と仰せられた。これ實にまた我等が聖人に對する知恩報徳の情である。年々歳々報恩講に遇いたてまつりて、ますます罪深き我身なることを知ると共に、ます／＼広大なる御恩を知らせて貰う次第である。 南無阿彌陀仏。

## 福島政雄

荒んで行く心は人生に背を向ける。併し背を向けるといふことは人生を真に厭うて居るのではない。人生に執着未練を持つて居るのである。執着があればこそ背を向けるのである。未練を持てばこそ之を正視することが出来ないのである。古の人は欣淨厭穢と言つた。欣淨を背景として厭穢するのである。故に厭離穢土と言ひながらその穢土を正視して居るのである。否諦觀して居るのである。眞に人生を厭う人は人生を諦觀する。眼をそむける人は人生の厭わしからぬ人である。

人生が真に苦であることを諦觀することはむつかしい。苦の諦觀が無いから荒んで行くのである。苦しいと言いながら楽しみを期待して居る。それが荒んで行く人のこころである。苦を諦觀する者は荒まない。それは苦に安住するからである。

荒むこころは人を求める。人を求めて人に遭わない、そこに荒みがある。人間を捨離することが出来れば心は荒まないようになる。人間を捨離して人間に處する心は荒まない。それは人間に真に親しむことが出来るからである。迷執の愛は荒み心の根元となる。愛なき人生は荒涼たるものであるとは吾々の常套語であるが、実は愛あるが故に人生は荒涼たるものとなる。愛を捨離し迷執を断ぜよ、そこには人生の荒まぬ姿が現われて來るのである。

荒む心は漂浪の心である。漂浪の心は人生を茫茫たる大海と觀ずる。而して此の身は大海に浮べる櫂無し小舟の如きものであると考へる。四顧茫々何のたよるべきものも無いと考へては荒む。この荒む心は人生を霧の中に見て居るようなものである。人生如々の相を見ずして霧や霞の中において見る。そこに荒む心の根元があるのである。

芸術的心境とは如何。芸術は人間の荒みを和らげるものであると称せられて居る。併し又芸術は人間の煩惱の境涯

を表現せるものとも言つことが出来る。かゝる芸術によつて人間の荒みを和らげようとするのは、煩惱を和らげるに煩惱を以つてしようとするようなものである。一時は和らぐこともあるが、それは一時の陶酔によるものである。陶酔が醒めると荒みは更に激しくなる。

文学は醉醒山であるという。文学の醉醒山に酔い且つ醒めよといふ。それは面白い。併しそれによつて荒みは如何になるのであるか。荒みの心が一時糊塗せられるのではないか。その後更に深刻なる荒みの心が起らないであろうか。荒まぬ心は何處に求むべきであるか。荒むものは機会さえあれば荒む。人生生活のあらゆる心が荒みの心の機会となる。食物に飲物に着物に住居に荒む心は起つて来る。食あれば食あるに荒み、食無ければ食無きに荒む。有無共に然し有無の彼岸とは何であるか。それは有にも無にも心が潤うということでなければならぬ。有無を超えた無何有の郷といふようなことではない。有にひとり無にひたつて着せずということである。有つても心潤わず、無ければなお更に心潤わずということは、此の心の底に何等のいのちの通いがないということである。心の底に無限の温かきいのちの通いを感じる時、そこから有にも潤い無にも潤う

心が新生する。これは信仰の境地である。それは有り難いという感じの境地である。いのちがいのちに通う味いである。冷く荒んで居る此の自分のいのちの奥にひた／＼と通りて下さる温い親の慈悲のいのちであり、しかも此の世のみならぬいのちである。そこには涙がある。荒み行く子のみならぬいのちである。そこには涙がある。荒み行く子のいのちをあくまでも憐みたまゝ涙がある。この涙は荒みを融しつくさずにはおかれぬ廣大無辺の涙である。それは目に見えぬ涙である。よしや久遠の業報としての荒みであつても融す涙である。

人生はこの涙によつて洗われ、人間の煩惱はこの涙によつて融かされる。荒み行く心は転ぜられて荒まぬ心となる。否荒み行くそのまゝの姿において荒まぬ久遠の親心の廻向にあずかるものである。廻向といふは賜物である。何処までも荒み行く心がこの賜物に融けて行く。そこには常住に荒み行く心とあくまでも荒みを融かすいのちとの接点がある。人間はひとり／＼が此の接点に立つて居る。荒み心が無くなつたとは云えない、併し如何に荒む心も融かされて行く。それは念佛の世界である。念佛の世界とは仏々相念に攝取せられて行く世界である。仏々相念の世界は久遠の親のまごとに響きわたる世界である。久遠の親のまごとに荒まぬ心である。それが常住に子の荒める心に通うのである。

## ⑯ 二 還 相廻向 の 願

これから第二十二の願を申し述べます。この願を還相廻向の願と云われて居ります。

「設い我仏を得んに、他方仏土の諸菩薩衆、我が國に來生せば、究竟して必ず一生補處に至らん。其の本願自在の所化、衆生の為の故に、弘誓の鎧を被り、徳本を積累し一切を度脱し、諸仏の國に遊びて菩薩の行を修し、十方の諸仏如來を供養し、洹沙無量の衆生を開化して無上

少しめり

かくうとこう 正真の道を立せしめんをば除かん、常倫諸地の行を超出

いぢめぞない

して現前に普賢の徳を修習せん、若し爾らずば不取正覺」

ことあります。そうでありますから阿弥陀仏の本願、法藏菩薩の弘誓のおかげを蒙つて、徳本を積累する、お念佛申すことが積み重り／＼して行くのであります。そして「一切を度脱し」とあります。これは一切の煩惱をぬけ切つて、一切の煩惱を自由におさめて、それを全活動のうちに静かならしめてしまい、全生命の活動をしながら諸仏の國に遊ぶのであります。その全活動をしているのがそのまま諸仏の國に遊ぶことになり、こうして六度の菩薩の行を修するのであります。この菩薩の行を修するのと諸仏如來を供養するのは同時でしよう。また諸仏の供養と、無数の衆生の教化とは同時であります。

往相と還相とすることをここで考えて見ましょう。諸仏を供養する、菩薩の行を修する、その姿のまんまが還相となるのであります。私共が御淨土まで行つて改めて衆生を教化するとよく云われますが、そうではなく、往く相がそのまま還る相であります。

鹿児島県の南薩摩に藤等影と云う方がありました。

昭和十二年にまだお元気でしたが、その著書の中に「我々はうしろ姿の教化をさせてもらうばかりである。御仏前で我々が手を合せている後姿そのままが孫や子を導くことになる」と書いてありました。これで大いに感じました。私共が眞に引きつけられて教化をうけることは聖人のように御自身があらわれるのであります。これが所化の菩薩であります。この教化を受けた菩薩が、衆生の為に、阿弥陀仏の弘誓を身につけて、そのおかげで働き出すのであります。どう働き出すかと申せば「徳本を積累し」で、徳本とはお念仏の

がひとすじに本願の道を進んでおいでになりますと、その後姿を私共は仰いでいる気持で何時も御教化を蒙っているのであります。又親が仏前で一心に拝んでいる、それが或る深い感銘をあたえるので、そのまゝ還相となるのであります。

この二十二願でもそういうことが云われているのであります。菩薩の行を修し十方如来を供養する、その菩薩の後姿がそのまゝ開化衆生の姿であります。言葉では往相還相と二つに分けてあります、我々の生命の上では往相即還相となつてゐるのであります。

「本願自在の所化」とあります、その所化の菩薩がそのまま、能化の菩薩となる、これは昨日読んで感じましたことであります。

次に、そういう菩薩の還相は「常倫を超出し、諸地の行をも超岀している」つまり常なみの諸地の行、或は初地の歡喜地とか七地とか八地、或は十地と菩薩に段階がありましたが、そういう段階を超越するのであります。そして往相即還相でありますから、何處の往相でもよい、五十二段の段階をのぼつて、更に下るというのではなく、たとえ一段でも三段でも弥陀の境界に歩みを運んでいるまんまが、還相の姿でありますから、到る處、いやしくも仏のさとりの境界に向つて行く姿があれば、仮令何段目でも、それがその

まゝ還相となるのであります。仏の境地までには五十二段あると申しますが、これは仮りにそう云われる所以で、一念發起の時、命終でありますから、いやしくも私に仏のまことにひかりが照りそうて居り、私の生命にしみとおつてある限りにおいて、私の人間生活の何處を歩いていましても、それはつまずきづめで、慘憺たる歩みであります。私が私の廻向ではなく、悉くが仏陀の廻向であります。私が生活に血を流して歩んでいても仏の往還二廻向の縁になるのではありません、そういうことであります。これが「常倫諸地の行を超岀して」ということであります。「諸地の行を超岡して現前に普賢の行を修習せん」とあります、普賢菩薩の徳が種々の人々の上に及ぶのであります。その縁に私共はなつてゐるばかりであります。然しそれには、私の生命に光寿二無量をうけているから普賢菩薩の徳を修習するということになるのであります。私自身が還相の菩薩であるといふのではなく、つまずいてばかり居る凡夫のまんまに往還二廻向をこの人生に感ぜしめる縁になつてゐるということになつて居ります。

## 還 相廻 向

六三番 井上善右工門

雲に入る鳥見るたびに思ふかな 願に乗じて天翔る日  
を

これは神戸の稻垣瑞剣先生が九十六歳で逝かれるごく晩年の遺詠であります、この一首を口ずさむと還相廻向の雄大なよろこびが生々とほとばしってゐるのを深く感ずるのであります。親鸞聖人は和讃に「南無阿弥陀仏の恩徳広大不思議にて、往相廻向の利益には還相廻向に廻入せり」と誦され、またつゞいて「往相廻向の大慈より還相廻向の大悲をう、如來の廻向なかりせば淨土の菩提はいかゞせん」と仰ぎ嘆じられています。

申すまでもなく仏法の真実は、自利利他二利圓満を体とします。自利を離れた利他はありませんが、また利他を離れた自利もないのです。煩惱具足の我等が如何にしてこの二利の真理を全うすることができるかです。そのため、先ず往相廻向の如來徳が自利として恵まれ、それがそのまゝ還相廻向の利他に転じるのであります。それを聖人は「往

まゝ還相となるのであります。仏の境地までには五十二段あると申しますが、これは仮りにそう云われる所以で、一念にひかりが照りそうて居り、私の生命にしみとおつてある限りにおいて、私の人間生活の何處を歩いていましても、それはつまずきづめで、慘憺たる歩みであります。私が私の廻向ではなく、悉くが仏陀の廻向であります。私が生活に血を流して歩んでいても仏の往還二廻向の縁になるのではありません、そういうことであります。これが「常倫諸地の行を超岡して」ということであります。「諸地の行を超岡して現前に普賢の行を修習せん」とあります、普賢菩薩の徳が種々の人々の上に及ぶのであります。その縁に私共はなつてゐるばかりであります。然しそれには、私の生命に光寿二無量をうけているから普賢菩薩の徳を修習するということになるのであります。私自身が還相の菩薩であるといふのではなく、つまずいてばかり居る凡夫のまんまに往還二廻向をこの人生に感ぜしめる縁になつてゐるということになつて居ります。

悶がそのまま、となるなら、それはこの身の救いとは言い得ません。「念佛していそぎ仏に成りて大慈大悲心をもて思ふが如く衆生を利益する」という還相廻向の如来徳が現在只今の身に徹してこそ、人生の解決と身の救いは全うされましょう。

さてこの事に関連して白井成九先生の若き日の追憶をここに録させていただきます。（聞法録より）

神は愛なりという言葉こそ私がキリスト教にひきつけられた根本の力であった。ところが聖書を読んでいる間に私は神の審判という教に触れた。イエスの伝える神はキリストを信ずる者をば之を嘉して天国に迎え神の子として永遠の祝福を惠む。けれどもキリストを信ぜざる者をば之を審きて地獄に落し、罪人として永遠に罰し苦しめる……私にとつて最も痛切に此の矛盾を感じしめたものは、私の亡き母の問題であった。私の十一歳の時、母は三二歳の若さを以て世を去った。その追慕の中に私は、人が死んで後に如何になるか、来生があるか無いのかわからぬけれども、母の生命が消えて無くなってしまつたとは思うに堪えず、如何にかして存在するに違いないと思つた。その母はキリスト教を聞かずに終つたので、今は既に審かれて地獄に罰せられ、消えざる焔に焼かれている。設い私がキリスト教徒になつて天国に招かれ生

まれようとも、神の子として永遠に祝福されようと、地獄に焼かれる母を奈何ともすることができない。そんな天国にどうして安んじ得よう。私は聖書の中から此の如くに審判する神と天国とを見出した時、其が久しく描いていた愛の神の姿と甚しく異なるに驚き、亡き母を慕いつつ、基督教会から離れてしまつた。

以上の一節は還相廻向の教の何たるかと告げて下さる思がします。浄土の慈悲と還相廻向、それは決して念佛者にとって架空な来世物語りではなく、現在只今この身を救う真実そのもの、息吹なのです。その息吹が先に掲げた瑞剣先生の遺詠にも躍如と感じられるのです。

いうまでもなく還相廻向は本願の第二十二の願に確かに誓われているところですが、そこには「常倫諸地の行を超えて現前に普賢の徳を修習せん」とあります。われわれが還相廻向を想念するとき、私がこの手でいとしい人々を救濟するという思いを懷きがちですが、「常倫の行を超出」した還相の世界は最早やそゝした人間的の思いを遙に超えた境界の活動であります。「普賢の徳を修する」ところどうして個我の意識をとめましょうや。自分が為すという意識は人間のものです。そこにはどうしても自我のはからいがつき纏います。我れ為すというとき我れ為せりという功の貢りを宿さざるをえません。それを超えしめら

れるところに無我自然の修普賢徳の大活動があります。瑞剣先生が「願に乗じて天翔る」と詠われたのはまさしくその事であります。最早自分が何かを為すと肩を張る何のものもそこには跡をとめません。何という有難くも尊い恵みの世界でありましょう。阿弥陀仏の光寿の活動と一味にならせていたゞく身の幸を謝さずにはおられません。

かく思いつ、ふと我が周辺を省みると、縁につながる諸の人々方々の上に還相の姿を感じるのは不思議な事です。誰が還相の権人であるか、そのようなことを判じ得る身ではありませんが、今まで自分が救わねばと悲しみ懃れみ念じていたその当の人が、私に仏法の真実を知らしめるべく現わされた人であつたと法爾と感ぜしめられる事も決して幻覚ではないのです。否、他を救わねばならぬと思つていた感情そのもの、中に自我意識の幻想があつよつていたのではないかと省みられます。まことに念佛の世界は微妙深々です。しかも同時に、普賢の徳に一味たらしめられる行手を思うて勇躍せしめられることは忝きかぎりと申さねばなりません。

合掌（正月二日記）

## 往 生

浅 原 才 市

わたしやしやわせ 死なずにまいる  
いきさせて まいる淨土が

なむあみだぶつ

どうで うきよを たつ身でござる

なむあみだぶつと つれてたつ

ごおんうれしや なむあみだぶつ

うきよたつとき だれとたつ

しゃばがてんじて みやこになるよ

まいつた衆生に だいひのおやよ  
おやにもろうた たからたのしむ

# 慈光日誌抄

いよいよ

西元宗助

尤

屋憲一教授のもので法藏館から出ると聞く。

年の暮、洛西・淨住寺の榎原徳草者師夫人から、名古屋の花田正夫先生ご入院かも、との憂いのお電話をいただく。気になりながらも、娘や孫たちに囮まれながらの賑やかな正月をすごす。その六日、名古屋の鬼頭きよ子様に電話すれば、花田先生の奥さま起居ご不自由なので、花田先生のご入院のためにも、ともかく泊りこみの家政婦さんが絶対必要、四方八方、心当たりにご依頼中のこと。

先生のご胸中を推察し、わが身の薄情をつくづく慚愧。○ナムナムとお念佛申す。本日（六日）は、わが木村無相翁の三回忌である。近頃、無相さんほどに、惜しまれてこの世を去つた方はない。如來招喚のお念佛ひとつに生き、そのお淨土に還つていかれた無相さん。その無相さんを偲んで、さきに砂田保氏の光雲社から好著が刊行されたが、このたびは岩崎成章師の『無相法信集』（定価千円。西村為法館）が出た。これも好著である。さらに近く大谷大学の大

旧年末、一人息子の积淀証の十七回忌法要を、伝道院の佐々木正典師、導師のもと、ほんの内輪で催す。その夜、ひとり信証の在りし日の写真をじっとみつめ、押し、お念佛申す。

わが子は、われにとりて最もきびしき善知識であること を沁み沁みと思う、それだけに切ない。ただ南無阿弥陀仏。腰骨を立て、静坐瞑目して、つくづく、『慈光』誌の多年の恩徳を謝し、花田先生ご夫妻の健康ご回復を祈念するこ と切々。（正月六日深夜）

卦主

## 芬陀利華

朝のモーニングショウという番組ができてから間もなくのことである。アナウンサーは木島則夫氏で、各界の名士

を呼んでその人生観を聞くという趣向であった。

あるとき、その番組に登場したのは、中山義秀という有名な作家であった。アナウンサーは朝の挨拶が終つたのち、单刀直入に「先生は癌の手術をされたそうですが、その後身体の具合は如何ですか」とたずねた。たとえそうであつても、癌という病名は患者には知らせないというのが一般的な常識であったから「中山氏は自分で癌ということを知つているのだろうか」と、ひそかに私は案じた。

ところが中山氏は「お蔭さまで大分元気になりました。しかし癌という病気は、ちょうど雑草のようなもので、切つても切つてもすぐ生えてくるという、實に厄介なもので生うるのみなり」という『正法眼藏』の言葉が頭をかすね

めた。中山氏はつゞいて「しかし、あの雑草の中にもきれいな花が咲きますね」といられた。「これは素晴らしい」と私は思つた。まさに曇鸞大師の『往生論註』に出てくる「高原の陸地には蓮花を生ぜず、卑湿の游泥に乃し蓮花を生ず」の文と同じではないか。きらわれながら生えてゆく雑草、しかしその中に一輪の花が咲く。じめぐした泥沼の中にも蓮の花が生えてくる。苦難多き人生の中に、否、そういう人生の中にこそ、無碍の白道が開けてくるのではないか、と思つた。

その他、いくつかの珠玉のような対話がつゞいたが、最後にアナウンサーが、「先生にとつて、今、一番大切に思われることは何ですか」という質問をした。それに対しても「今の私には地位もなければ名誉もない。最後の財産と思つていた健康も空しいものでしかなかつた。しかし私にはまだ時間がある。今日一日生きているということは、何ものにも代えがたい貴重な宝です」といわれた言葉が、今も

脳裏に刻まれている。それから約一年の間に、中山氏の死が新聞に報ぜられていた。

（シエリヨウ）

ところで私は、昭和五十三年元旦の修正会に、龍谷大学本館講堂で、学長に代つて、教職員に法話した。そのとき私は文学部長の職にあつたが、法話の内容は右に述べた。

中山氏の言葉を骨子にしたものであつた。  
それから、たつた二十日あまりののち、私自身が脳血栓に倒れて京都市立病院に入院し、病床に呻吟する身となつた。あるいはこのまゝ死ぬのではないか、と思つたこともある。

しかしその苦しみの中にしみじみと念佛が味わわれた。「病気になつたればこそ、ご法義がよろこばれる」というのが、この頃の私の心境である。

（昭和六十年六月一日見真より）

### 夏安居を終つて

今年の安居は、文字どおり炎天下の一週間であつた。ところが私には、それほど暑くは感じられなかつた。というのは、私にとっては一生一度の安居本講師という重責を担い、「正信念仏偈」を講説する身になつたからである。同時に、無事にその大役を果すことができるであろうかとい

が私の健康を案じながら聴講して下さつた温かい励まし、

それと大衆諸賢の同情もあつて、つつがなく大役を果すことが出来た。私はさながら『阿弥陀経』に出てくる十方諸仏の護念の中にある私を感じながら、無事に終つたことであつた。

「うれし」と「ありがたし」と（三）

（法味・隨想）

とあつて、区別がつきにくい。

私が病気になつて、もう七年になる。あの京都市立病院に入院しているとき、ある婦人が見舞いに来られて「病気を敵にしてはいけません。病気を友として仲良くして下さい」といわれた。その時、内心では「馬鹿なことをいうな、他人のことだと思つて。この苦しみがわかるものか」と思つたことがある。

ところが最近では、齊藤翁と同じように、「病気をして嬉しい」とは思わないが、「有難いと思う」ようになつた。  
そこで私流に両者を比較すれば、「ありがたし」とは、病気をしてはじめて今まで気づかなかつた喜びの再発見であり、「うれしさ」にはそのような語感はない。だから「うれしさ」は「シンプルなよろこび」であり、「ありがたし」には「屈折したよろこび」である。そしてそれは、まさしく「転悪成善のよろこび」に外ならない。

（1）快い、喜ばしい、楽しい  
（2）ありがたい、かたじけない

（1）世に稀である、たぐいがない、めずらしい  
（2）かたじけない、もつたいない、恐れ多い

う、不安があつたからである。

開鑑式の当日は、ご門主をはじめお歴々の前でうまく言葉が出るであろうかという危惧の思いと緊張とがあつた。

（シカレバ 大聖ノ直言ニ帰シ、太祖ノ解釈ニ閱シテ、仏恩

ノ深遠ナルヲ信知シテ、正信念仏偈ヲ作ツテ曰ク

という「偈前の文」が、意外にもすらりと口から出た。自分で唱えながら、自分の声を「ありがたい」と思つた。それ以後は、比較的スムーズに、予定された原稿を読むことが出来た。

なぜ、それほどに「言葉」に拘泥するのか、という不審を抱く人もあるであろう。が、七年半前に脳血栓に倒れ、

その後、徐々に回復しつゝあるが、今も言葉が不自由な私である。発病当時は「正信偈」の文字は私の記憶の中から全く喪失していた。それを記憶に甦えらすには、かなりの時間が必要であった。京都市立病院に入院していたとき、午后になると沢見先生（主治医）が病室に来られて、毎日一緒に「正信偈」の練習をしていたことを思い出す。その頃は「正信偈」も読めなかつた私が、今、安居の大衆の前で講義をしているのだ。安居一週間の講義中、それを思い出すたびに、絶句したことしば／＼だつた。

総理和上をはじめ諸和上のやさしい労わり、教え子たち

### 相送？・孤生津隆哉？

しかし私の場合は、その喜びの心境を味わうのに、六年、七年の年月が必要であった。ご法義のよろこびもまた、長い間かかる純熟するものであり、その代りに、いつまで

# 無相法信集

岩崎成章

## (一) 私は無仏法者

このごろの、私の実際をもつとはつきり言うと、私は「仏渚者」でも「真宗の信者」でも「念佛者」でもない。まったくの、ドロ凡夫、まったくの煩惱だけの人間で、「仏法」や「真宗」の落第者であり、もうとも、「真実信心」とか「念佛者」とかにはなれないもの、そういうう望みは持つても、そうならない人間と、つくづく思い知らされているのです。

これで私の言う我が機は悪衆生、邪見、無信の者、という意味のだいたいはわかってくれることだと思います。したがって「二種深信」とか「機の深信」とかは落第なのです。谷内さん、その上に、私は、腹の底から「往生」とか「成仏」とか「念佛往生」とか「念佛成仏」とかを、願つていません。私は、二十歳以来、私なりに、ある程度は「往生」とか「成仏」に取り組んで来たつもりでいましたが、このない人間だということをこのごろ特に思い知らされたのであります。私は、二十歳以来、私なりに、ある程度は「往生」とか「成仏」に取り組んで来たつもりでいましたが、このごろ、そんな殊勝なことを、本気では決して願つていません。

の人間であると思われる今頃です。  
そういう意味での我が機は悪衆生、邪見、無信の者なので、まったくの真宗の落第生なのであります。  
真宗の信者でない今の私にとっては「二種深信」も「機の深信」も問題ではなく、もちろん「機の深信」などといふことは、まったく落第なのであります。  
それで「二種深信」でなくてはならぬ、「機の深信」に徹底しなければならぬというようなことは「真宗の信者」さんの言うこと、考えることであつて、「仏法者」でも「真宗の信者」でもない、ただのドロ凡夫の私にはどうでもよいことであり、とても、とてもそんな者にはなれない自分であります。そんな信者さんにもなろうと思つて、まったくの「無信の者」と思い知らされている今頃です。  
そうしてそれを悲しいとも思わないような、  
谷内さん、私が機は悪衆生、邪見、無信の者と書いた気持ちわかつてくれましたか、それではもう一つ、我が法は南無阿弥陀仏と書いたことはこれまで真宗でいうよ  
な「二種深信」の一つである。

「法の深信」といったような意味で、我が法は南無阿弥陀仏と書いたのではありません、そう書いたかどうかはわすれてしましました。  
それでは何故そんな我が法は南無阿弥陀仏と書いたかと

人間であったということを、つくづく思い知らされているのであります。それで「無信の者」というよりもさらに「無信仰の者」宗教や仏法や、真宗をもとめていないただのたびの、ドロ凡夫、煩惱だけのドロ凡夫にしかすぎない私が、ということに気がつかされたので、そういう意味での我が機は悪衆生、邪見、無心の者と書いたのであります。

機は悪衆生、邪見、無心の者と書いたのであります。  
くり返し言つて「機の深信」などというような真宗的な氣のきいたものでは決してないのです。

さらに言つて、自分は「往生」も「成仏」も「悟り」もまったく、自分としては無能無力で、まったく落第であるばかりでなく、本当は、そつしたものと、心から求めていなかつた、まったくの無信のドロ凡夫、名利愛欲等の煩惱だけの人間と思い知らされているこのごろです。

さらに、そういう自分をあわれとも、悲しいとも、真宗の「真実信心」の人を、二種深信の人を、うらやましいとも、何とも思わぬようだ、ただのただの凡夫である、煩惱だけ

いうとまったくのドロ凡夫、「仏法者」でも「真宗人」でもなく、まるつきりの煩惱だけの人間であり、自分としては、往生も、何も求めている人間でなく、まったくのドロ凡夫としか思えないのに、どうして南無阿弥陀仏がこの私を見はなししてくれんといふか、「往生」とか「極楽まいり」をねがつてもいないので何かの時に南無阿弥陀仏と申され、何かと苦しい悲しい時、こまつた時には南無阿弥陀仏が申される。

南無阿弥陀仏に逃げこむ私であるという意味で我が法は南無阿弥陀仏と書いたのであります。

真宗落第の人間が今さら、本願を信じ念佛して助かるうとして申すのでないが、何故か何かにつけて念佛が申され、また忘れていても、私として、粗忽に思つていても、南無阿弥陀仏が、私からはなれておくれぬので我が法は南無阿弥陀仏と書いたのです。  
そういう意味で、まったく、仏法落第、真宗落第、往生落第、念佛落第、信心落第、二種深信落第、機の深信落第の深信落第、念佛者落第、信心者落第、「仏法」も「真宗」も願わないような、まったく、救いよう、助かりようがない、ボーボー、センダイ、外道（げどう）の仏法者でない、本能だけの名利、愛欲だけの、まったくのドロ凡夫の私が、ただなんということなしに、南無阿弥陀仏からは、はなれ

られん、ただそれだけの私だということなであります。仏法も信心も念佛も往生もない願わない私に影法師が、はなれんよう南無阿弥陀仏がくつつきまわつており、また影法師がないとさびしいよう、南無阿弥陀仏がつきまとつてくれんときびしい私なのです。

それで七十五歳の今日からの私の聴聞は、もつともつと、「私」というものを知りたい、どうしてこんな私に南無阿弥陀仏はくつつい、影のようにはなれんのであらうか、ということについて聴聞したいと思つばかりです、といつて、聴聞して「助かる」「信心頂こう」「念佛者になろう」「往生しよう」というのではあります。

そのことはもうまったく落第なのですから、落第で満足している、落第のまゝ、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、今はもう、これつきりの私です」ということなのであります。

谷内さん、私はこうした「仏法」「真宗」「往生」「信心」「念佛」「二種深信」等々皆、まるつきり落第のまつたくの「無信の者」「外道」であります、今後はそつしたことは願わずに、たゞまつたくのドロ凡夫、無信の者として、今まで以上に、聴聞はさせて頂きたいと思つてゐるのであります。

たゞ今まで何と言つても「仏法者」「真宗者」「信者」になりたいところがあつたよう思われますが、もうその方はあきらめて、たゞ「聴聞」だけはつづけていきたいと願つてゐます。

（二）私の最後の言葉

（三）御文四ノ

「往生極樂之道」とか、「生死出離の道」とか、などと、とてもむずかしいことのように思つていましたが、そんなむずかしいことを如来様が、お考えになるはずはなく、ただお互いの、煩惱の「心」「口」にあらわれたもうて「往生極樂の道」とは、「生死出離の道」とはただこのナムアミダブツ一つであるぞよとお知らせ下され、気付かせて下さるだけのことにて、よき人の仰せ、如來聖人様の、「たゞ念佛せよ」との仰せのままに、たゞ念佛するだけのことにて、それも、もう、若い時から、この口にお念佛申してゐる、そのままで、その他なんにも、文句も、理屈もいらないのででした。

たゞ、そのことに、気づかせて頂くばかりなので、それで、「念佛一つ」「たゞ念佛」と『歎異抄』でも申すのであります。

『慈光』誌に書いていたる先生方の、大先生である在榮吉先生の臨終、いよいよ最後の時の、ちぎれちぎれの言葉を花田先生が書いていて下さいます。

「池山先生がいよいよ人生の最後にあたり、頼りとたのむ何一つ残らぬ御身の底に、たのまるたゞ念佛ばかりが

つてゐることです。

そういう私だとよく知つて、今後はおつきあい下さいませ。このようなボーボー、センドライ、外道、無信の者によくまあ、南無阿弥陀仏ははなれんことよ、見はなさないことよであります。

今後の聴聞は、もつともつと「自分」はどんな人間であるかということを、また「南無阿弥陀仏」とは、どういうものであるかをあらためて聴聞させて頂きたいと、七十五歳からの聴聞をこころざしていることです。くり返し言つて、「聴聞」して今さら「仏法者」「信者」「往生者」「念佛者」になろうという考えは今のところ全然ありません。

谷内さんにとっては、ものたりない、たよりないであります。しかし、今頃の私のありのままを書かせて頂きました。我が機は惡衆生、邪見、無信の者、我が法は南無阿弥陀仏ということは、こういう意味で書いたので真宗安心の機の深信、法の深信といったような、私に出来もしないことをよくわかつて下さいませ。

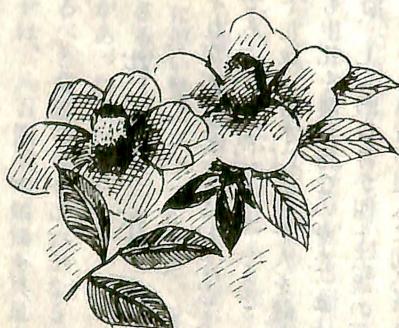
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

厳然と残り続けた、尊くもたのもしい御心境を、とぎれとぎれながら、お顔をほころばせられて、「何も残るものはない、何も残るものはない、ただ念佛だけが残つてくれる、えらいこつたよ、ありがたいこつたよ」と地上での最後の言葉を残されたのである」と書いて下さいましたが、いつ、最後となるかわからぬ私にも、人生、七十八年、生きて来て残つてくれたものは、たゞ念佛だけでありますから、よいよ最後のつもりで、念佛詩、歎異抄を、たゞ念佛を中心、どうにか書いたのでありました、わかつて下さい、私の最後の言葉、念佛詩と思って下さい。

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ



# 如來は同心の最大良友なり

花田正夫

知己  
史記  
刺客

近角常觀先生が二十九歳の秋、人生問題で大苦悶におちられた時、はじめて仏の何處までも御見捨のない大悲心にめざめられた刹那、同心の最大良友は仏なり、と表白せられた。そして生涯を貫いてその眞の仏の大悲心を私共に伝えて下さったのである。

昔から「士は己を知る人のために死す」と云う。そのよい例としては明治大帝と乃木將軍、また西郷南洲翁と桐野利秋がある。日露戦争の時乃木大将は第三軍の司令長官として旅順を攻められたが、難攻不落であった。陸軍では乃木をかえようとして明治陛下に言上すると「乃木を換えよ」とは乃木に死ねと云うことだ」との一言に、乃木將軍は死を以つて答えられた。又桐野は貧しい農家の生れで、弟子入りする時、サツマ芋を挨拶の土産とした。翁をとりまく人々はこれをなじつた時、翁は「君方は物ばかり見て心を見おとしている。彼は今貧しいので何もないが、彼はいのちまで捧げる人だ」とあたりの人々を叱責し、桐野に向つ

ト土通

我々は、名と財と愛などをたよりとしているが、蓮如上人の仰言るように「まことに死せんときは、かねてたのみおきつる妻子も財宝も身にそるものとは一つもなし。死出の山路、三途の大河を唯一一人にて行きなんぞれ」であるが、唯ここに、眞の知己を恵まれる時、「一人でも行かねばならぬ旅なるを弥陀にひかれて行くぞうれしき」の蓮如上人のよろこびを頂けるのである。

親鸞聖人の教行信証に有名な三哉の御述懐がある。「誠なる哉、攝取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮すること莫れ」と、「誠に知んぬ、悲しき哉、愚禿鸞、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近くことを快まず、恥づ可し傷む可し矣」更に、「慶しき哉、心を弘誓の仏地に樹て念を難思夜」の法海に流す。深く如來の矜哀を知りて、良に師教の恩厚慈をとられて、その一筋道をたどらせていただけるとは、何という幸慶であろうか。

さて牛歩遅々であるが私自身が歎異抄と池山先生によつて、眞の知己としての如來を知らせていただいたたどりを述べよう。

さて牛歩遅々であるが私自身が歎異抄と池山先生によつて、眞の知己としての如來を知らせていただいたたどりを述べよう。

最初は、手当り次第に孔子、ソクラテス、キリストと捨い読みをしているうちに、自分自身がそれについて行けぬことに気づいて、行方を見失っていた時、伯父と池山先生に教えられて歎異抄を手にした時、一番驚いたのは、「弥陀の本願には老少善惡の人をえらばれず」の一句であった。よくなれ、賢くなれ、でないと人から捨てられるぞとばかり教えられていた私に、「老少善惡におへだてのない本願のころにふれたことであった。そして相対差別の範疇から出られない人間にはありえぬところであるのに、聖人がこれをお述べ下さるのは、月光が太陽の光の照り返えしであるように、聖人にして聖人ならぬ心、即ち如來の心そのままで御身にうけられた自然の返照であると気付き、そこに智目なく行足のない身も、ここばかりは安心して帰れるところであったと、心の故郷を恵まれたのである。

第四条に「今生にいかにいとほし不憐と思ふともこの慈悲始終なし」の一句は、万策つきて別れねばならなかつた父の枕頭であつた。そこに厚い壁にズツつかつた、涙の中看護をさせて頂けたことがあつた。

更に、第十三条に「さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべし」との聖人の仰せは、八万四千の煩惱を具足する身とて、それに相当した身にもつた業縁にあうと、どうい

う業さらしをするかも知れぬ親鸞であるとの仰せは、私自身がどう云う業さらしをして、万人から呆れられ、見捨てられようとも、聖人ばかりは何時でも、何處でも、何をしていようとも同座して下さると知らされ、聖人こそ真の知己でますと、限りないよろこびを覚えた。丁度それは

私が岡山医大の三回生の時であつた。父を亡くしてのち、学資に困っていた私はM家のお世話になつて、然しこじめの間はよかつたが、毎日接近してすごすうちに、お互の欠点が見え、それが重なると心と心の間に厚い壁が出来る。そのことは是非はよく分つていても、自分に始末がつかなくななり、自分が逃げ出しが、相手が居なくなる他に道がなくなった時、この聖人の仰せが異様な力をもつて心にひびいて来て、聖人こそ外からの教師でなく、今一人の私であると知らされ、生れてはじめて有難いなあ！となり、父の墓前にも御礼参りしたのであつた。

最後に、歎異抄の第九章に「名残り惜しく思へども娑婆の縁つきて力なくして終る時彼の土へは参るべきなり、喜ぶ心もなく、いそぎ淨土へまいりたき心なき者をことにあはれみ給ふなり」の仰せは、私の六十五歳の時、膀胱腫瘍で入院した時である。年齢と云い、病と云い、いやがおうでも私自身の死の横顔にふれた。そうなれば嵐の海に浮ぶ孤舟であった。岸の上からは親しい人々の声がするけれど、

私自身の力にならない。この身にたつた一つの光であり支えは、この聖人の仰せであった。「火宅無常の世界、煩惱具足の凡夫はみなもつてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念佛のみぞまことておはします」と聖人は仰言つてゐるが、そこに永遠に手を執つて下さる念佛のたのもしい手を仰いだ。

六高時代からの友人で、医師の渡辺紋一さんの臨終の病床で「五十年來の友情も、無常の嵐の前に消えて行くが、お念佛の攝取不捨のみ手ばかりが、生死を超えて俱会一処させて頂けるね」と共々に念佛唱和したことであつた。

何時かすでに御紹介したが、山口県の信友が

病める身も弥陀の誓に生かされて

業苦の海に夕陽かがやく  
と、御礼とお別れの一首を頂いたことも重ねて思い出されることがある。

以上、聖人によつて如来は眞の最上の知己であると知られ、白道のよき伴侶をいただけるのである。「旅は道づれ世は情」と云うが、人生の独り旅もここに明るい伴侶をいただき、白道をたどらせて下さるのである。

あ

と

が

き

花の三月となりました。私の病気につき、皆様に御心配いただき、御礼も申上げず勝手しております。家内も身体が不自由なので御賢察願います。

近角先生の御原稿は、先生の御自督でありますので私共の実生活の上に大きな燈火を掲げて下さいました。法は人によつて伝わると申しますが、貴重な御言葉であります。

福島先生の「こころ」から抄出させて頂きました。とかくきびしい世にあたつて荒み易い私共の手をとつて下さいました。又淨土へ生れる道のみに心を向ける私共に、還相

の恵みをお誓い下さったことをお述べ下さいました。私自身老い且つ病の続くにつけこの御誓こそ大きなたのみであるといただいております。

井上先生はお忙しい中を御苦労おかげいたしました。白井先生の信徳がそこに自然にじみ出でおりますことをうかがえるものであります。

西元先生はお元氣で、私共の老病の姿をいかにも御心痛おかけしておりますことをおわび申すばかりであります。村上速水先生は脳血栓で一時はどうなることかとお案じ申しておりましたが、慚次御快方に向われ、その間障り多

きに徳多しのお言葉通り貴重な信昧をお頒ち下さいました  
「旅は道づれ、世は情」と申しますが、独生独死獨去獨來の人生にあつて、知己を惠まれることはありがたいことであります。蓮如上人の

一人でも行かねばならぬ旅なるを弥陀にひかれて行くぞうれしき

のお歌もその機微を讚仰されました。然し實際生活の上でそれを導びいて下さる方、親鸞聖人いまさづばとても味い得なかつたと愧じております。

三月も例会を休ませて頂きます。

定価	半年	八〇〇円(送共)	愛知県西加茂郡三好町大字福谷
一年	一六〇〇円(送共)	印刷入	天野昭夫
名古屋市南区駿上二丁目古三七番		名古屋市南区駿上二丁目古三七番	
編集・発行人	花田正夫	發行所	
電話	八二二局七〇三七番	振替口座	名古屋六二三三三番
郵便番号	四五七		
西元	光社		